

# 經濟論叢

第九十五卷 第六號

---

経済学における理論と実践 .....	吉村達次	1
1890年代論争にあらわれた ロシア資本主義論の類型 (1) .....	田中真晴	14
零細専業農家の堆積構造 .....	福本邦行	39
不働費計算・理論の史的考察 (2) .....	西村明	56

---

昭和四十年六月

京都大學經濟學會

## 1890年代論争にあらわれたロシア 資本主義論の類型(1)

——ナロードニキと合法マルクス主義のばあい——

田 中 真 晴

1890年代のロシア資本主義論争を、史観論争と飢饉論争・ヴィツテ体制論争として追跡し、ついでそれぞれの思想集団の経済学的装備（「資本論」支配の意味）について述べた前稿<sup>1)</sup>のあとをうけて、それぞれの思想集団の代表的なロシア資本主義論の構造を検討する段階に至った。まずナロードニキと合法マルクス主義を対象とし、そのあとマルクス主義へすすむことにする。ナロードニキのロシア資本主義論としては、ヴォロソフ В. Воронцов (1847—1918, 筆名ヴェ・ヴェ), ダニエリソン Н. Даниельсон (1844—1918, 筆名ニコライ・オン), ついでユジャコフ С. Н. Южаков (1847—1910) が重要であるが<sup>2)</sup>, もっとも整備された代表的労作としてダニエリソン「改革後のわが国の社会経済概要」《Очерки нашего пореформенного общественного хозяйства, 1893》<sup>3)</sup>を選ぶ。合法マルクス主義の経済関係の著述家としてはストルーヴェ П. Струве(1870—1944), トッガン-バラノフスキー М. И. Туган-Барановский

1) 田中真晴, 1890年代ロシア資本主義論争における思想と経済学, 「経済論叢」95巻1号, 1965。

2) ヴォロソフについては松岡保氏の研究を参照されたい。松岡保, ナロードニキのロシア資本主義論, 桑原武夫編「ブルジョワ革命の比較研究」1964, 所収は, 「ロシアにおける資本主義の運命」《Судьбы капитализма в России, 1882》を, 同, ロシア資本主義没落論の経済理論的基礎, 「人文学報」20号, 1964, は「理論経済学概説」《Очерки теоретической экономики, 1895》を対象にしている。ユジャコフは90年代自由主義ナロードニキの中心的雑誌「ルースコエ・ボガットヴォ」誌の経済コラムの担当者で, レーニンが「人民の友とはなにか」の失われた第2分冊でナロードニキ経済学の代表者としてとりあげたのはユジャコフであった。その他 И. Каблиц (筆名 Юзов), Г. П. Сазонов をもふくめての概説が История русской экономической мысли, т. I, ч. 2, 1960, стр. 264-332 にある。合法マルクス主義は там же, стр. 357-412。

3) わたくしが使用したのはその仏訳版, Nicolas-on, Histoire du développement économique de la Russie depuis l'affranchissement des serfs, 1902, vii+523 p. である。

(1865—1919), プルガコフ С. Булгаков (1871—1944) の名があげられるが<sup>4)</sup>, ストルーヴェ「ロシアの経済的発展の問題にたいする批判的覚え書」《Критические заметки к вопросу об экономическом развитии России, 1894》とトゥガン「過去および現在におけるロシアの工場」《Русская фабрика в прошлом и настоящем, 1898》<sup>5)</sup>を代表作としてとりあげる。

わたくしは以下の稿を考えるにさいして、レーニン（と一部はローザ）に教えられることがすくなくなかったのではあるけれども、論争の当事者レーニンが問題としなかった点、言及はしても中心には据えなかった点で、しかもそれぞれの論者にとっては重要であったものに注意し、またレーニンによって否定的に整理しつくされたものを、いまいちどそれぞれの原形にたちかえって把握しなおすことに努めようと思う<sup>6)</sup>。そうすることはレーニンの労作を歴史のなかでとらえなおすことへのひとつの布石にもなるはずである。

## I ダニエリソン——ナロードニキ

ダニエリソンの「改革後の……概要」が飢饉論をひとつのモチーフとして成った次第は前稿において述べたが、そのモチーフをうちに包みつつ、この労作

4) プルガコフは「資本主義的生産のもとでの市場」《О рынках при капиталистическом производстве, 1897》「資本主義と農業」《Капитализм и земледелие, 1900》の著者。1890年代においてストルーヴェは、図書館に勤めもしたが、20歳年上の女性の庇護をうけて主として評論家として活動、しばしばドイツに滞在、マルクス主義、ドイツ社会政策学会左派、セムストヴオ自由主義者らとのひろい接触をもった。トゥガンは経済学者で1890年以後経済学の論著多く、<sup>1</sup>現代イギリスにおける産業恐慌、その原因と国民生活におよぼす影響」《Промышленные кризисы в современной Англии. их причины и влияние на народную жизнь, 1894》につぐ第2の大作が「……ロシアの工場」である。1895—99年にはベテルブルク大学講師。プルガコフは1894年モスクワ大学卒業後研究室に残り、モスクワ帝国工芸学校で経済学を教えた。他方、ナロードニキのダニエリソンはベテルブルクの相互信用組合の会計士として糊口していた。R. Kindersley, *The First Russian Revisionists*, 1962, pp. 29f., 52 f., 59 f.

5) わたくしは独訳版 M. Tugan-Baranowsky, *Geschichte der russischen Fabrik*, 1900, VI+626 S. を使用した。

6) 市場論争は以下の行論においても示めされるように、それぞれのロシア資本主義論において重要な構成的意義をもつことに間違いはないけれども、ロシア資本主義論争が市場論争だけにひきしぼられて、とくに市場理論—実現理論にひきしぼられて整理されると、ナロードニキの議論は馬鹿々々しい謬論の一語につきてしまう。われわれにとっては、ロシア資本主義のある種の特徴や問題性が、誤った理論的見解に制約されたはずみをもたせて、しかし実はそうしたはずみをうむ視角からこそ指摘されたことが大切なのである。

は「1861年の農奴解放以後のロシアの経済的発展の歴史」<sup>7)</sup>をあきらかにしようとしている。第1篇、資本主義と農業、は書名と同じ名で1880年に執筆された論文、第2篇、資本主義と工業、はそれよりもずっと大きい書きおろし稿である。ふたつの篇はテーマにおいて補完関係にあるとともに、第1篇は1880年以前を、第2篇はそれ以後を対象としている点で「第2篇は第1篇の歴史的延長」<sup>8)</sup>とされる。そのように歴史的順序を追う構成になっているけれども、過去そのものの歴史的研究はこの書のテーマではなく、1861年から1890年初頭の現在時点までをロシアの現代として把握し、その経済構造と発展動向を見きわめることが本書のテーマであるというべきである。つぎに、後段における合法マルクス主義のロシア資本主義論との比較を考慮にいられて、注目すべき諸点を摘記してゆこう。

(1) 1861年の農奴解放の性格規定は、日本資本主義分析における明治維新に対比すべき重要性を、ロシア資本主義分析においてもつといえるが、ダニエリソンは61年改革を、それ自体としては、資本主義を防止する意図のものであったと考える。「1861年2月19日の宣言に表明された立法者の意図においては、永久的用益権を賦与した土地に労働を結合することが、国内の福祉と社会の繁栄との保証となるべきはずであった。」「資本を土地に適用することに反対するために……勅令は生産者に労働手段を与えた」<sup>9)</sup>ダニエリソンは61年改革における土地切り取りには注意を向けず、もっぱら土地つき解放としての特殊性を強調する。かれによれば、ロシアの資本主義化は、主として改革後に、改革の理念を裏切って強行された資本主義化政策によっておしすすめられた。

そのように議論を展開するさいにダニエリソンは、「生産手段が生産者に所属する経済形態」である「人民的生産」と「生産手段が生産者に属さない経済形態」である「資本主義的生産」とを相対抗するふたつの経済組織として考え

7) Nicolas-on, *op. cit.*, p. i.

8) *Ibid.*, p. vi. 1880年執筆の部分(=第1篇)については、1880年代におけるロシア資本主義没落論の抬頭を論じるさいに言及した。田中真晴、一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説、「経済論叢」89巻1号、1962.の第3節を参照。

9) Nicolas-on, *op. cit.*, pp. 75, 81.

ている。「人民的生産」は小商品生産(単純商品生産)ではなく典型的には現物経済において成りたつものとされる。それは農村共同体を発想基盤としていると推測されるが、そしてじじつダニエリソンは共同体の破壊に反対しているのではあるけれども、共同体思想それ自体はかれにおいてはかなり稀薄になっている<sup>10</sup>。「人民的生産」はむしろ自立的な小生産者から構成される経済制度である。ダニエリソンはそうしたものとしての人民的生産が61年改革前のロシアにおいては支配的であった、そしてその基盤は現物経済であったと考える。そして改革後のロシア経済を人民的生産が資本主義によって危機におとし入れられてゆく過程として把握する。このことから知られるように、ダニエリソンには農奴制から資本主義へ、あるいは農奴制の残基やその解体化といったとらえかた、総じて経済制度としての農奴制の把握がみられない。農奴制はほぼ現物経済に等置され、後者に置きかえられている。

(2) ダニエリソンは資本主義を上にもたように「生産手段が生産者に属さない経済形態」と規定している。この規定は産業資本の支配をいわばネガティブな面から規定しているようにみえるが、ダニエリソンが資本主義という言葉をつねに産業資本の支配の意味につかっているかという点必ずしもそうではなくて、商業資本・高利貸資本による生産者の搾取を資本主義と名づけているとともに、他方では産業資本一般よりも狭く、大工業だけを資本主義といっているのである。ヴォロソフは「わたしは生産の形態としての資本主義がロシアにおいて支配する可能性を否定するが、民力の搾取の形態および段階としての資本主義の将来にかんしてはなにごととも予断しはしない」<sup>11</sup>と述べて、生産の形態としての資本主義と搾取の形態としての資本主義とを区別し、搾取の形態としての資本主義の将来については保留して、生産の形態としての資本主義の運命を問題にした。ダニエリソンはヴォロソフのように二種の資本主義概念を区

10) かれは本書の最後の部分において、共同体を破壊しようとする政策に反対していると同時に、共同体に固執するナロードニキを「狭隘すぎる」と批判している。かれ自身は自分をナロードニキとはちがうと考えていた。Cf. *Ibid.*, pp. 496-497.

11) В. Воронцов, Судьбы капитализма в России, 1882, стр. 5. 松岡保, ナロードニキのロシア資本主義論, 前掲書, 580ページを参照。

別してはいないけれども、内容的にはヴォロンツォフと同様であるといつてさしつかえない。

すなわち、ダニエリソンは第1篇「資本主義と農業」において、「改革後の国家のすべての経済活動は資本主義に寄与している」とし、「すべての資料が、生産者のますます多くの部分が取奪されつつあることを、われわれに信じさせる。すなわち生産物中における生産者の分け前の減少と資本家の分け前の増大が、ますます多くの生産者をして土地を放棄させ、土地の耕作を止めさせている」<sup>12)</sup> ことをくわしく述べているが、このように述べているばあいの生産者とは穀物生産者たる農民であり、資本家は穀物仲買人、高利貸し等を主たるものとしてふくんでいる。資本主義とはここでは直接には流通過程的取奪の進行のことに他ならない。流通過程的取奪の行きつくさぎとしての農民の土地からの遊離が資本主義（「生産手段が生産者に属さない形態」＝資本主義）であって、それはただちに産業資本の成立と同じではないのである。他方、「資本の歴史的役割は労働の社会化にある」<sup>13)</sup> というばあい、また、ロシアの資本主義は資本主義の歴史的使命を果さない、ロシアの資本主義は80万人程度の労働をとらえているにすぎない、などというばあいの資本、資本主義は資本主義的大工業（「工場」）をさしている。資本主義という言葉のこのような二種の使用法に注意することは、ナロードニキのロシア資本主義論を理解するうえで重要なひとつの点である。そこには搾取ばかりが強化されて果実の乏しいロシア資本主義にたいする問題意識、ロシア資本主義の非西欧的類型性についての問題意識が表現されている。もちろん、かれらが二種の資本主義を方法的概念として把握していたとか、前期的資本と産業資本との対抗関係を問題にしたのだとするのは行きすぎである。しかしかれら、というよりいまのばあいダニエリソンは、流通過程における取奪の強化をつぶさに描き、そのような取奪が産業資本の順

12) Nicolas-on, *op. cit.*, p. 81.

13) *Ibid.*, p. 444. 「労働の社会化」とは、孤立的・分散的な労働を社会的に結合することであり、ダニエリソンはそのこと自体は進歩的現象と考えている。しかしかれは商品交換（市場）を媒介とする「労働の社会化」をねぎにして、労働組織（工場内的分業＝協業）をもっぱら「労働の社会化」としている。

調な成長と手をたづさえていないこと、そこに問題があることをかれの分析において示し、強調している<sup>14)</sup>。かれは、商業資本が発展すれば自然に産業資本に転化するという資本主義成立論とは異り、それを否定する考え方である。

(3) 第1篇のテーマは、61年の改革後における国家の資本主義化政策が、農民経済を危機におとし入れてきた過程の分析である。そのばあい、鉄道と信用制度がもっとも強力なファクターとしてとりあげられている。鉄道会計と鉄道のための公債についてのくわしい叙述はこの書のなかで注目すべき個所のひとつと思われるが、鉄道の農民経済に対する破壊的影響は、ひとつは鉄道建設の費用の大部分が結局は農民の租税負担になること、農民は租税支払いのために穀物の販売を強制されること、いまひとつは鉄道によって穀物の大量的輸送が可能となり、穀物の大量的商品化とくに穀物輸出が促進されることである。穀物の商品化には穀物商の買い叩きが普遍的現象であり、農民は自己の消費水準をますます悪化させつつ穀物の商品化を強制される。ダニエリソンはこの過程をくわしく跡づけているが、そのさい租税制度自体よりも穀物の商品化を決定

14) マルクス、エンゲルスの1870—80年代初頭のロシア論にはその点の強調がみられる。「要するに、ほかならぬこのロシアにおけるように、ブルジョア社会がまだまったく原始的未開状態にあるにもかかわらず、資本主義的寄生制度がひじょうに発展していて、全国土、全国民衆がその網にかけられ、かつまきこまれていく国はどこにもない」(エンゲルス、ロシアの社会関係、1875年、「マル・エン選集」9巻、137ページ)。「農民の負担と犠牲とにおいて、国家は、西洋の資本主義制度の諸部門を温室のなかで助成させたのである。ところがこれらの諸部門は、農業の生産的諸前提をすこしも発達させないで、非生産的な仲介者たちによる農業生産物の盗掠を容易にし、つよめるのにもっとも適しているのである」「ある類型の資本主義が、すなわち国家を仲介として農民の負担によって養われている資本主義が、共同体に対立している。それにとつては共同体をおしつぶすことが利益なのである」(マルクス、ヴェラ・ザスリッチへの書簡草稿、1881年、同上、196、205ページ)等々。マルクス・エンゲルスのロシア社会論については注8)の拙稿第3節を参照。マルクス・エンゲルスのロシア社会についての論説・書簡をもっとも多く引用しているのは、私のみたかぎりでは、マルクス主義者ではなくてダニエリソンである。かれはマルクス・エンゲルスから受取った私信をもふくめて数多く引用し、さらにマルクスの「祖国雑誌編集部への手紙」の全文を付録として載せている。ここではとりあえず二点だけ指摘しておく。ひとつは、ダニエリソンが1870—80年代はじめのマルクス・エンゲルスの所論がそのまま90年代ロシアにも妥当するとし、自説を支持するものとしていること。そのさいマルクス・エンゲルスの所説のうちかれに運するものだけを採っていることはいうまでもない。いまひとつは、しかしそれにしてマルクス・エンゲルスのロシア論のひとつの核心であり、ダニエリソンがかれなりに継承したところの、ロシア資本主義の類型的特質の問題が合法マルクス主義・マルクス主義のがわきには消えることである。すくなくともロシア資本主義没落論対発展論の論争にかんするかぎりにおいては、そういえると思う。そしてマルクス・エンゲルスのロシア社会論は、われわれがロシア資本主義の類型的特質の問題を考えるうえで、ある点ではレーニンを越えて示唆的なものをふくんでいるように思われる。

的なものとしている。というのはダニエルソンは「人民的生産」を現物経済と結びつけていることに対応して、資本主義を商品経済とほとんど同一視している、あるいは商品経済はかならず資本主義化をひきおこすと考えているからである。このばあいの資本主義は、さきに述べた二種の資本主義の意味に照していえば、もちろん大工業としての資本主義ではなく、流通過程的搾取としての資本主義である。「信用と鉄道は現物経済の貨幣経済への転化を加速化する。貨幣経済は資本主義経済である」<sup>15)</sup>。

いまひとつ注目すべきことは、ダニエルソンが61年以後の過程を、「資本論」第1部24章の引用によって原著過程として把握していること、だが同時に、典型的な24章の原著とのちがいを述べていることである。「公債は原始的蓄積のもっとも強力な槓杆のひとつとなる。魔法の杖を振るかのように、それは不妊の貨幣に生殖力を与えてこれを資本に転化させるのであって……」「必要生活手段への課税(したがってその騰貴)を中軸とする近代的国家財政は、だから、それ自身のうちに自動的累進の萌芽を宿している……」「保護制度は、製造業者を製造し、独立の労働者を収奪し……」<sup>16)</sup>などの原著の諸契機は、61年改革後の過程にあらわれた。これに反して、「全過程の基礎」である「農民からの土地収奪」は、土地つき解放たる61年改革によって予防されたから、過程の前提的・基礎的なものとしてはロシアには見られない。むしろ61年以後の過程の結果としてそれがあらわれる危険がはらまれており、一部に(全般的、決定的にはない)その進行がみられるのである。他方において、「鉄道は最初、近代的工業が高度に発展した諸国、すなわらイギリス、アメリカ合衆国、ベルギー、フランスなどにおいて、いわば作品の点晴 *couronnement de l'œuvre* として出現した。点晴と呼ぶのは、それが最後にあらわれた近代的生産手段となっただけでなく、銀行をはじめとするさまざまな株式企業の組織にたいして新しい刺激を与えて、巨大な株式会社をつくり出す基礎の役割りを果たしたから

15) Nicolas-on, *op. cit.*, p. 81.

16) *Ibid.*, pp. 76-77. 「資本論」, アドラツキー版, 第1部, 794, 796, 797ページ。

17) Nicolas-on, *op. cit.*, p. 80.



である」<sup>17)</sup>。それに反して近代の工業の発展よりもさきに鉄道をもったロシアにおいては、鉄道の役割りも先進国とは異った。「鉄道は貿易の発展につよい刺激を与えるが、主として未加工品を輸出する国の貿易は大衆の貧困を増大させる」<sup>18)</sup>のである。ダニエリソンの意を汲んでいうならば、鉄道が資本主義的蓄積過程の産物であるとともに資本主義的蓄積の飛躍をうんだ先進諸国とはちがって、ロシアでは鉄道が原蓄の動輪となっている、というのである。

(4) 第2篇、資本主義と工業は、繊維工業の発展の検討からはじめられている。そのさい概念規定や統計資料の利用法に問題があり、あいまいさはあるけれども、ともかくここでは産業資本それも工場(大工業)の発展がテーマのうちにとりいれられている。ダニエリソンは1880年代後半の統計に拠って綿業を中心とする繊維工業の生産額の増加を認めている。しかしかれが強調するのは生産額の増加自体ではなく、生産額の増加率に比較して工場労働者の増加率が小さいことである。「1886年には319,5千人が繊維工業に従事し、25,5千万ルーブリの価額を生産した。1889年には労働者数は439千人にふえたが、生産された商品の価額は52,2千万ルーブリにふえた。したがって労働者数は34%、生産額は104%だけ増大した。……比較的長い期間をとってしらべてみると、綿業だけでなく全繊維工業においてまったく同じ現象、すなわち労働者の1パーセントの増加は生産価額の3パーセントの増加に対応するという現象をわれわれはみる」<sup>19)</sup>。かれはまた、鉦業をのぞく工場労働者数が1865年に829,573人、1890年に875,764人、したがって25年間に5.5%だけ増加した、これは人口の増加率を下廻っている、とも主張している<sup>20)</sup>。また他の個所では1890年のロシアの工業・運輸・商業労働者を約100万(人口は約12,000万)と見積っている

18) *Ibid.*, p. 81.

19) *Ibid.*, p. 147.

20) これはかれのつぎの論文における主張である。Николай-он. Нетто об условиях нашего хозяйственного развития. "Русское богатство", No. 6. 1894, стр. 103. 同様の主張はカブルコフ、カルリオンヅエフらにもみられる。Vgl. Tugan-Baranowsky, *Geschichte der russischen Fabrik*, SS. 414, 426. ナロードニキのそのような主張における統計利用の方法論の問題点については *Ibid.*, S. 426 f.

る<sup>21)</sup>。わたくしが旧稿において「賃労働者数一定論」<sup>22)</sup>と名付けたヴォロンツォフの見解は、やや緩和されたかたちにおいてにせよ、このようにダニエリソンの主張するところでもあった。そしてダニエリソンもまたヴォロンツォフと等しく、それをもって、「労働の社会化」を果すものとしての資本主義（ヴォロンツォフの言葉では「生産の形態」としての資本主義）がロシアを全機構的にはとらえることができないことの実証証明と考えている。そして一見矛盾するようだが、そのようにロシアの一角に限られた資本主義工業自体の内部においては、資本量または生産額に比しての労働者数の相対的減少という資本主義的蓄積の法則がむしろ極端なかたちで発現していると考えているようであって、労働年齢の農民男子の18パーセント以上が失業者であるといった事態を、資本主義的工業の雇用能力の小ささに関連して説明している<sup>23)</sup>。

(5) つぎに、ロシア資本主義が発展しえないことの説明原理として市場論が登場する。その市場論は、ロシア資本主義が先進資本主義諸国とはちがった市場問題を背負っていることをいうロシア市場論とも名付けるべき命題と、資本主義の市場一般に関する市場理論の命題とから成っている<sup>24)</sup>。もちろんふたつは無関係ではなく、市場理論はロシア市場論の経済理論的基礎であるが、ロシア市場論は市場理論に還元しつくされはしない。

「他の資本主義諸国よりもおくれて、市場の大部分がすでに占有されつくし

21) Nicolas-on, *op. cit.*, p. 484.

22) 田中真晴。プレハーノフのロシア資本主義論(3)、「経済論叢」91巻3号、1963を参照。わたくしは1880年代にプレハーノフが批判の対象としたヴォロンツォフ＝チホミーロフのロシア資本主義没落論の主要命題は、(1)市場不足論、(2)賃労働者数一定論、(3)クスターー＝人民的生産論、(4)共同体不変論の4つであると述べたが、このうち(1)、(2)はほとんど同じかたちでダニエリソンの労作にあらわれ、(3)はすこしかちをかえ、(4)は影をうすくしている。なお(4)はヴォロンツォフについても再考を要するようである。松岡保、前掲論文を参照。

23) Nicolas-on, *op. cit.*, p. 484. ダニエリソンは鉄道・信用制度を槓杆とする流通過程の取巻だけが農民を零落させているというのではない。それと関連しての農業からの加工業の分離、工業資本主義による農民副業の駆逐が農民経済を零落させる決定的なものと、かれは考えている。工業資本主義は農民経済を没落せしめ、しかも農民を工業プロレタリアートに転生させる力をもっていない。そこに龍大な失業人口が生じている、というのである。

24) ダニエリソンが市場問題を比較的ままとった形で述べているのは、*Ibid.*, pp. 249-264, 385-404. かれは別に市場理論について論文を書いている。Николай-он. Условия развития внутреннего рынка для продуктов крупной промышленности. "Русское богатство", No. 4, 5, 1899.

たのちに、われわれの競争者たちの労働の生産性がわれわれのそれをはるかに追いついたあとに、労働の生産性が年ごとに外国市場の発展を追いこしているときに、資本主義の闘技場に入ったために、われわれは国内市場で満足することを強いられた<sup>25)</sup>。しかも国内市場は農民の窮乏化のためにますます縮小しつつある。ロシア資本主義は国内市場を掘りくずすことによって自己の存在基盤を喪失してゆく。ダニエリソンのこのようなロシア市場論は、祝座の偏りと謬論をまといながらも、世界史の古典的帝国主義の時期によやく本格的な発展をはじめた後進資本主義国の国際環境的状况(穀物輸出国という役割り)と、それと関連するところの、鉄道が原蓄の動輪となり、急速な資本主義化の重荷が農民にかけられる内的構造の問題性を、いいあらわしている<sup>26)</sup>。それに対して、資本主義は資本主義内部においては剰余価値を実現することが不可能であるから、外国市場を必要とするという命題は、資本主義の市場一般に関する単純な謬論にすぎない<sup>27)</sup>。ダニエリソン自身は、資本主義というものは本来そうした本質をもっているのに、ロシア資本主義はさきにもたような状況を背負っているのだから、いよいよ発展は絶望的であることを証しえた、と考えているのであるけれども。

(6) ダニエリソンにおけるロシア資本主義の特殊性についての立言と資本主義一般についての立言の重層性は、もっとも注目すべきところであって、それは前述の二種の資本主義の意味、原蓄および市場論において、それぞれの仕方であらわれているが、総括していうならばかれの議論のひとつのすじは、ロシ

25) Nicolas-on, *op. cit.*, p. 464.

26) ダニエリソンの市場理論はもちろん間違っている。しかしレーニンがかれの市場形成理論表(「レーニン全集①」, 90-91 ページ)において労働力商品化=市場拡大をしめすばあい、独立生産者が賃労働者にすぐに転化することを想定しているのだが、ダニエリソンは独立生産者が浮浪者化する事実を重視している。この点は注意さるべきである。注23)を参照。ロシアがそのなかに置かれている国際経済的状况については *Ibid.*, p. 336 f. ただし世界資本主義のなかにおけるロシアという視角はヴォロソフのほうかダニエリソンよりもはるかに明瞭である。

27) ダニエリソンは再生産表式について、「マルクスが、資本主義経済の生産物が資本主義の限界内で分配され消費される表式を呈示したのは事実だが、(それは現実的諸要因を捨象したからであり)……じっさいの生活においてはそうはならない」(*Ibid.*, p. 440 n)と述べている。価値法則その他、経済理論についてのダニエリソンのマルクス理解ないし誤解については Н. К. Караев, Народническая экономическая литература, 1958, стр. 59-72 を参照。

ア資本主義は西欧資本主義とはちがっている、西欧資本主義の積極面がロシア資本主義にはなく、わるいことばかりだという主張。いまひとつは、しかし西欧資本主義も資本主義としての限界をもっているのもであって、羨むべきものではない、かりにロシアが西欧なみの資本主義になることができるにしても、それは望ましいことではない、という議論である。さらに、ロシア資本主義の西欧資本主義化は客観的に不可能だという議論がそれに絡んでいる<sup>28)</sup>。

ダニエリソンがロシアとの比較のために引きあいに出すのは主としてアメリカである。アメリカの資本主義はロシアとは異って、農業生産力のめざましい上昇を伴った。「合衆国ほど急速に絶対的にも相対的にも富裕になった国は世界中ではかにはない」<sup>29)</sup>。この国は「最近までは、工業製品の販売のための国内市場にほとんど完全に満ち足りていた」<sup>30)</sup>。ダニエリソンによれば、アメリカの農業が繁栄した主たる原因は「土地が安価で手に入ることと移民の流入」<sup>31)</sup>であるが、アメリカの資本主義工業はゆたかなファーマーを根幹とする国内市場に拠って発展することができた。「アメリカとロシアのあいだのもっとも本質的な差異は、アメリカのファーマーは科学と技術の進歩を享受したことである」<sup>32)</sup>。その点、アメリカ資本主義は、かの1891—92年の大飢饉をひきおこすほどに農業を荒廃させたロシア資本主義と異っている。だが、そのアメリカでさえも、とダニエリソンはすぐにつづける。アメリカでさえも最近では農業人口が相対的にも絶対的にも窮乏化しはじめた徴候があり、国内市場は縮小しはじめたのだと。その理由として、農業の生産性がある程度以上に進むと農産物の価値下落をひきおこして農業収入が減少すること、新設農場の増加率が小さくなってきたこと、農工分離の進行が国民所得のなかに占める農業収入の比率を低

28) 「わが国には、アメリカ合衆国にみられたような、国内市場の、したがって資本主義的工業の急速な発展のための条件はかつて存在しなかったし、いまも存在しない。」 Николай-он, Условья развития внутреннего рынка для продуктов крупной промышленности. "Русское богатство", No. 5, 1899, стр. 31. Н. Э. Л. стр. 63 から引用。

29) Nicolas-on, *op. cit.*, p. 415.

30), 31) *Ibid.*, p. 414.

32) *Ibid.*, p. 292.

下させたこと、世界市場における穀価下落の影響などが挙げられている<sup>33)</sup>。その論証は理解するに苦しむところが多いが、ダニエリソンの考え方は、資本主義工業のための国内市場は結局のところ農業人口の購買力に依存するのであるから、資本主義の発展によって生ずるところの、国民総生産中に占める農業生産（農業所得）の比率の減少は資本主義の国内市場を縮小する、というにあるといえよう。ここにかれの市場理論のアメリカに対する適用がみられる。ともあれ、だからアメリカはロシアの学ぶべき模範であるよりもむしろ、それをみてみずからを警めるべき前車の轍なのである。ダニエリソンは「ロシアはアメリカ合衆国の経済発展の歴史からいかなる教訓をひきだすことができるか」<sup>34)</sup>という自己の問題提起に対してそのように答えている。

(7) 問題をロシアにもどして、現在のロシア経済の基調はどのようなものであるのか。61年改革後のロシアにおける人民的生産様式と資本主義との「ふたつの経済形態の闘争において、資本主義の潮流があきらかに打勝っている」<sup>35)</sup>とはかれのしばしば云うところである。だがその資本主義の優勢化とは直ちに産業資本の順調な展開を意味するのではなかった。大工業としての資本主義はロシア経済の深部の規制者ではない。「西欧の経済生活において70年代末までみられた10~11年のサイクル」はロシアの経済生活にはみられない。資本主義を特徴づけるかの景気循環とはまったく別のもの、「穀物の収穫、それも収穫がどれほどの価額で実現されるか」<sup>36)</sup>がロシア経済の脈搏を規整していると、ダニエリソンは主張する。実はかれの市場理論によれば、ロシアだけでなくい

33) *Ibid.*, p. 413 f. とくに pp. 425-442. ダニエリソンは農工二部門分割で再生産を考えるのだが、そのさいつねに農業が基本であって、農業からの加工業の分離、農業に対する工業の不均衡的拡大は再生産過程の崩壊をうちにふくむ、と考える。そのさい農業=農民的農業、工業=資本主義的工業が想定されている。

34) *Ibid.*, p. 405 f.

35) *Ibid.*, 81. ほかに p. 443 f.

36) Николай-он, Нецто об условиях нашего хозяйственного развития, "Русское богатство", No. 6, 1894, стр. 107. Н. Э. Л. p. 62 から引用。ダニエリソンは「改革後の……概要」においても同様に述べており、またこの点についても、マルクスがロシアにおける飢饉の周期性について言及しているダニエリソンあての1881年2月19日付書簡（「マル・エン選集③」, 233-234ページ）を引用している。Nicolas-on, *op. cit.*, p. 478.

かなる資本主義も窮極的には農業収入によって市場を規定され、したがってその発展をも制約されるはずである。だから農業収入による規制をロシアの特殊性だというのは混乱をふくんでいるけれども、ダニエリソンのいいたいのは、窮極的な市場限界だけでなく、年々の経済活動の水準が直接に農業収入によって規制されているところにロシア経済の非資本主義的性格がある、ということであろう。かれはある個所では、穀物価額が（翌年度の）鉄道貨物運送量・商品取引高等の水準を規定していることを示すための表を作成し<sup>37)</sup>、他の個所においては、1886—89年の期間について、農民の穀物販売による収入、商品生産総額、綿紡績・織物製造額、利潤額、雇用労働者数、の年度ごと比較表を作成して、「すべての工業生産の原動力 le moteur principal は土地からの収入、収穫の割合であることがわかる」<sup>38)</sup>と断定している。

ダニエリソンはロシアの経済構造をそのようにとらえた。最後にかれはロシアの課題を「すべての人民がその成果を享受しうるような仕方でも生産諸力を発展させる」<sup>39)</sup>こととしているが、前稿において述べたように、ロシア社会の将来についてのかれの見通しは明瞭なものではない。かれは先進資本主義諸国における資本集中の進展が社会主義への過渡をさし示していることをいう<sup>40)</sup>と共に、ロシアに対しては資本主義化政策の停止を訴える。しかし共同体社会主義に対する70年代ナロードニキの情熱と期待はもはやほとんど消えている<sup>41)</sup>。

37) *Ibid.*, pp. 52-61. および巻末付表Ⅱを参照。

38) *Ibid.*, p. 222

39) *Ibid.*, p. 490. ダニエリソンはもちろん、ロシアの全面的資本主義化の回避可能性について述べているマルクス・エンゲルスの論述を引用している。*Ibid.*, p. 494-495, 507-509.

40) *Ibid.*, pp. 336-342. しかしこの個所でカルテル、トラストなどに論及しているのは仏訳版のための加筆箇所かも知れない。

41) ダニエリソンの本書に対しては、論敵ストルーヴェのふたつの書評 P. Struve, "Zur Beurteilung der kapitalistischen Entwicklung Russlands", *Sozialpolitisches Centralblatt*, III. Jg., Okt. 1893, SS. 1-3; do., "Nikolai-on, Studien über unsere Volkswirtschaft nach der Bauernemanzipation, 1893", *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*, Bd. VII, 1894, SS. 350-358 と、本書の独訳版（筆者未見）刊行にさいしての、J. Karski, "Nikolaj-on über die russische Volkswirtschaft", *Neue Zeit*, 18. Jg., Bd. 1, 1899/1900, SS. 51-55 があり、あわせて参照することができた。カルスキは「この書物のロシア経済の叙述についていうと、部分によって、価値がずいぶんちがう。流通過程の描写はすばらしい……。それに反してロシアの工業発展をとりあつかっている諸章は、はるかに弱く、随所に明白な誤りがある」(*Ibid.*, S. 53)と評している。妥当というべきであろう。

## Ⅱ ストルーヴェ——合法マルクス主義 (Ⅰ)

ストルーヴェとトッガンとは、1890年代(とくに1894—98年)における合法マルクス主義といわれる思想運動の中心的メンバーであった<sup>42)</sup>。かれらのロシア資本主義論は合法マルクス主義のロシア資本主義論である。それは、ナロードニキのロシア資本主義没落論を全面的に批判してロシア資本主義発展を主張する点において、80年代におけるロシア・マルクス主義の先駆的ロシア資本主義論、ブレハーノフ「われわれの相違」(1885)を継承し、また90年代におけるブレハーノフ、レーニンらと方向を同じくするものであるが、しかし同じくロシア資本主義発展論といっても、マルクス主義が階級を基礎視点とするのに対して、合法マルクス主義の基礎視点はつきつめれば生産性であった、ということができるとであろう。そのようなちがいはもちろん、ふたつの思想の基本的な構えのちがいにともづくのであるが、ロシア資本主義論にあらわれるそのちがいは、以下の行論において知られるはずである。

ストルーヴェとトッガンのロシア資本主義論は、ともに合法マルクス主義のロシア資本主義論としての基調において成り立っているけれども、両者のあいだには、専門のちがいや、労作の性質のちがひ、ときにはかなり重要な点についての見解の相違があり、そしてまた互に補完しあってもいるのである。

ナロードニキとの論戦で先頭に立って切りむすんだのはストルーヴェであった。「ロシアの経済的発展の問題にたいする批判的覚え書」は前稿において述べたように、ナロードニキを相手としての史観論争・飢饉論争の直接の産物であり、そのロシア資本主義論の章においては、前節で紹介したダニエリソンの「改革後の……概要」を、ヴォロンツォフ「ロシアにおける資本主義の運命」と一括して、批判の対象として正面に据えている<sup>43)</sup>。したがってそれは、ナロードニキ

42) 田中真晴、1890年代ロシア資本主義論争の特徴と背景、「経済論叢」92巻5号、1963年、第2節、R. Kindersley, *The First Russian Revisionists*, 1962, pp. 29-72; P. Struve, "My Contacts and Conflicts with Lenin", *Slavonic Review*, Vol. XII, 1934, pp. 573-595; С. Л. Франк, Биография П. Б. Струве, 1956, стр. 11-30 を参照。

43) П. Струве, Критические заметки……, 1894, стр. 178

のロシア資本主義論に対する合法マルクス主義の批判点を知るのに恰好の書である。それだけでなく、レーニンがまたこの書に対する批判を書いているため<sup>44)</sup>、この書は、続稿においてレーニンの基礎視点を合法マルクス主義への批判として論じるためにも好便である。という理由で、トッガンの分厚い労作「過去および現在におけるロシアの工場」に先立って、(執筆の時間的順序に従うことでもあるが) ストルーヴェの労作をとりあげることにする。ただし「……批判的覚え書」は大作ぞろいのロシア資本主義論のなかではむしろ小著であるだけでなく、ロシア資本主義論プロパーにあてられているのは100ページあまりにすぎず、ダニエリソン、トッガン、レーニンらの労作とはちがって、資料の肉づけのうすい批判的覚え書であることは否めない<sup>45)</sup>。それといまひとつ、ストルーヴェは哲学と農業問題にくわしかったが、工業については、工場法問題を別とすれば、あまり研究していないようである。トッガンがストルーヴェを補完する点とストルーヴェと対立する点は、トッガンを検討する次節で述べるであろう。

さて、ストルーヴェの論点を前節と対応させてまとめてゆこう。

(1) ダニエリソンが1861年改革を資本主義防止の理念によっておこなわれたとするのに対して、ストルーヴェは改革は「なによりもまず、国家の物質的・必要から出た」<sup>46)</sup>とし、ツァーリズムは当時の状況のもとで増大しゆく国庫の必要を充足するためには、国民の経済活動を活発化し、国民経済の生産力水準をたかめて、租税源泉を確保することが必要であり、生産力を束縛している農奴制の廃止に踏みきらざるをえなかったのだ、と説明する。ストルーヴェによれば、61年改革において従来の農民の保有地の一部が地主に切取られたこと、農民は自己の土地となった部分に対しては市価以上の買取りを義務づけられ

44) レーニン、ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判、1894年末—1895始め執筆、「レーニン全集①」。わたくしの使用した版本はレーニンが使用しているのと同じである。

45) 「……批判的覚え書」の成りたちと構成については、田中真晴、1890年代ロシア資本主義論争における思想と経済学、94, 98, 100ページ、注、28)を参照。それゆえストルーヴェの所説の確認のために、本書のほかにも本稿注41)にあげた論稿をふくめて、ドイツの雑誌への寄稿諸論稿で入手できるものを参照した。

46) П. Струве. Критические заметки……, стр. 195.



たことを、ダニエリソンは十分に認識していない。「オン氏(ダニエリソン)は1861年の解放を西欧的・資本主義的経済秩序と相容れない」<sup>47)</sup>としているが、西欧とロシアの農奴解放の方式およびその史的意義をそのように正反対のものとするのは正しくない、かれは主張する。かれ自身は、61年改革を妥協的形態にせよ資本主義化への基本的方向にあるものと解するのであるが、61年改革についてのかれのダニエリソン批判は、改革の方向規定のほかに、ふたつの方法論的争点をひめている。そのひとつは、改革を「改革の理念」から説明するダニエリソンの「観念論的史観」に対して、物質的・必要によって規定された国家の政策として説明するかれの方法である。それはかれの考える史的唯物論の方法にほかならないが、経済を階級関係の視点で把握するレーニンに対比するばあい、階級視点が稀薄で(ただし欠けているのではけっしてない。それはときにはつよく出ている)、政策を経済状況への適応運動としてだけ理解する傾向(経済的決定論)がみられる。61年改革の把握においてもその傾向がしめされている。第2は、ダニエリソンが西欧とロシアのちがいを強調するのに対して、ストルーヴェが西欧とロシアの同質性をみようとすることであって、ロシア対西欧という類型化的発想と、西欧とロシアを同一発展線上の先後にあるものとする段階論的発想の対立は、いま述べたところから知られるように、61年改革のとらえ方にもあらわれている。

つぎに61年改革以前のロシア経済について。ダニエリソンは現物経済の支配と「人民的生産」をそこに見たのに対して、ストルーヴェは改革以前にすでに「農業からの加工業の分離すなわち社会的、国民的分業は、かなりの程度において存在した」<sup>48)</sup>として、改革前=現物経済という命題を否定する。さらに「人民的生産」なるものは「いかなる現実の歴史的制度にも対応しない」「わがロシアにおいては1861年までは人民的生産は農奴制度と密着していた」<sup>49)</sup>と

47) Там же, стр. 47

48) Там же, стр. 189

49) Там же, стр. 177. ストルーヴェとレーニンとの見解の相違は、レーニンをとりあげる段階であらためて考察する。

指摘している。

(2) ストルーヴェは人民的生産なるカテゴリーをしりぞけるだけでなく、ナロードニキの資本主義の概念は一般にせますぎると批判する。われわれはダニエリソンについて事実上二種の資本主義の意味がみられることを述べたが、ストルーヴェがせますぎるとして批判するばあいにもっぱら念頭においているのはもちろん資本主義＝工場制工業の意味の資本主義である。ストルーヴェは資本主義概念の検討においてはヴォロンツォフを対象にしているのだが、ヴォロンツォフのいう「イギリスの形態の資本主義」あるいは「生産の形態としての資本主義」がそれである<sup>50)</sup>。ストルーヴェによれば、ナロードニキは資本主義をそのように狭く解するがゆえにロシアの資本主義化を疑ったり、人民的生産対資本主義生産というシェーマを設定することができるのである。そこでストルーヴェは「相当な量の雇用労働の使用を基礎とする生産の組織」「集中化された大規模生産の発展」<sup>51)</sup>を狭義の資本主義と呼び、「交換経済の支配によって特徴づけられる経済制度」あるいは「交換経済の発展」<sup>52)</sup>を広義の資本主義とし、狭義の資本主義は広義の資本主義の結果としてあらわれるのであって、広義の資本主義こそが「経済のおよび社会的な、重大な客観的意義をもつ」という。ここでつぎのような疑問を読者はもたれるであろう。それならば、ストルーヴェの広義の資本主義はナロードニキのいま一種の資本主義概念（ヴォロンツォフの「流通の形態としての資本主義」）と同じではないか、と。たしかに両者の意味するところは、対象的事実としては大きく重なりあうが、しかし概念の設定の基準はまったく異質的である。ナロードニキのばあいに考えられていることは、資本による生産者からの流過程程の搾取であって、交換経済はそれを可能ならしめる条件である。ストルーヴェにおいては、流過程程の搾取が存在すると否とにかかわらず、というよりもむしろ純型的には流過程程の搾取

50) Там же, стр. 247. 資本主義という言葉のいろいろな用法の検討については, там же, стр. 124-128.

51) Там же, стр. 124, 282.

52) Там же, стр. 246-247, 282.

なき、ないしはそれを拾象しての、交換経済の発展それ自体が広義の資本主義である。ストルーヴェも商業資本の産業資本への転化をいわないではない<sup>53)</sup>。しかし同じく合法マルクス主義者のなかでもトッガンが商業資本から産業資本への転化を基本的図式としている(次節参照)のに対して、ストルーヴェは商品生産・社会的分業の発展を基本においている。かれは「結論の定式化」においてつぎのように述べている。

「商品生産は労働の生産性を高めることによって、これまでどおりの地域に龐大な数の人間を生存させる可能性を与える。……交換の発展は農業から加工業を分離し、それと同時にそれら両者のあいだに組織的な相互作用を確立することによって、農業および工業の進歩を促進する。……加工業の部門においては、広義の資本主義は狭義の資本主義を遅かれ早かれ不可避的にもたらす。……強化された交換の影響下における社会的分業の発展は、農業人口の相対的減少と都市の成長およびその他の事実へと導くが、それらのことのうちに社会の全構造の根本的な変化が示される。……商品生産はもっとも強力な文化的要因である。ある国がひとたび商品生産の発展の道を歩みだすと、その国のすべての文化的、政治的および経済的進歩はこの道のその後の成功に依存する。他方において、文化的および政治的諸関係におけるすべての前進はただ資本主義の発展と勝利に貢献しうる<sup>54)</sup>。」

ストルーヴェのこの図式は、ナロードニキに対しては、商品生産(社会的分業・農工分離)の意義の積極的評価においてまったく異なり、他方レーニンと比較するならば、資本主義成立における労働力商品化の決定的意義を無視している点において相違している。(農奴制のとりあつかいについては別に論じるであろう。) わたくしは前稿において合法マルクス主義の偏ブルジョワ合理主義的「資本論」理解について述べたが、ストルーヴェの資本主義発展の図式は

53) たとえば、「農村においては商業と高利貸によって、ある種の、過少評価してはならない原始的蓄積がおこなわれてきた。この投機的資本主義(いわゆるクラーク論)はそれを基盤としている。しかし時とともに投機的資本主義は生産的資本主義に転化するにちがいないし、そうなれば、わたくしの考えでは国民のために利益であろう」P. Struve, "Die wirtschaftliche Entwicklung Russlands und die Erhaltung des Bauernstandes", *Sozialpolitisches Centralblatt*, I. Jg., Aug. 1892, S. 415.

54) П. Струве, *указ. соч.*, стр. 282-283

マルクスよりもむしろスミスのたものであることが、あきらかであろう<sup>55)</sup>。

(3) ストルーヴェは上のような資本主義発展の図式に拠ってロシア経済の資本主義化を考察する。そのさいまず目を惹くことは、ダニエリソンが改革後の歴史を原蓄それも鉄道を動輪とする特殊ロシア的原蓄の強行過程としてとらえたのに対して、ストルーヴェにおいては原蓄が消えることである<sup>60)</sup>。ストルーヴェは国家の経済政策を無視するのではない。しかしかれは、経済政策を商品経済化の促進という視点からだけとらえるために、権力を媒介とする流過程の収奪も貨幣資本集積もともに、非本質なものとしてドロップしてしまう。ダニエリソンが「資本論」第1部24章について、もっぱら権力の政策による流過程の収奪としての原蓄を読みとったのに対して、ストルーヴェは反対に、社会的分業＝市場形成だけを読みとったのである。両者のそのような見解のちがいは鉄道の意義のとらえ方においてもっとも尖鋭にあらわれる。

ダニエリソンは、西欧においては鉄道が資本主義という作品のいわば点晴であったのに、ロシアでは原蓄の動輪としてあらわれたと主張するのに対して、ストルーヴェによれば、イギリスはともかくとしてアメリカにおける鉄道の出現の時期とその経済的意義は、ロシアと異るところはない。「北アメリカにおいては鉄道は、資本主義との関係においては、けっして作品の仕上げではなかった。その反対に、鉄道はこの国の経済的発展の重要な規定的契機であった。鉄道なしにはこの国の経済的発展はまったく不可能であり、考えられぬことである。」「北アメリカは1861年以來、純農業国たることをやめ、加工業を異常な急速さをもって発展させた。しかもこの発展はほとんどもっぱら国内市場にもとづいている」<sup>57)</sup>が、それは鉄道なしにはありえなかった。ロシアについても「現

55) それとともにストルーヴェは、農業国から農業・工業国への展開ということを経リストを引用してしばしば述べている。Там же, стр. 182, 261, 262 f. このばあいスミスとリストはもちろん矛盾しない。

56) わたくしがいうのは、基本的な発想のなかに原蓄の契機がない、ということである。これはかれの史的唯物論の経済史観的解釈と関連しているところがある。それに反して、かれが原蓄をいうばあいがあることは注53)の例にみられるとおりでである。なお、そこでの原蓄が国家権力を契機とする原蓄ではないことに注意。

57) Там же, стр. 261-262.

在の経済的条件においては、主として蒸気運輸の存在のために、交換経済と狭義の資本主義はますます一般的な現象になりつつある。農業が商品流通の圏内にひきいられることは、ロシアにとって、この過程における第1次的契機であり要因である<sup>58)</sup>。ダニエリソンがロシアの鉄道を穀物の飢餓的輸出の強行手段とみたのに対して、ストルーヴェは商品生産・国内市場形成のための不可欠の利器とみたのである。

(4) ストルーヴェはロシアの繊維工業の資本主義化についてすこし述べているけれども、工業の資本主義化それ自体のたち入った分析はしていない。(その点はトッガンの労作がくわしい。) それに反して工業(とくに繊維工業)の資本主義化が農民経済の凋落に対してどのような関係があるか、さらにすすんで現在のロシアの経済的窮状と諸矛盾の原因はなにか、という問題は、ストルーヴェがもっとも熱心に論じているところである。ダニエリソンが資本主義化をすべての禍悪の因であるとするのとは正反対に、ストルーヴェは資本主義にはほとんど罪がない、という。農民的農業は商品生産のなかにひきいられることによって、一般的零落ではなくて、農民の階層分化 дифференциация крестьянства が生じる。それは市場経済の必然性であって、「工業資本主義が農民的農業を零落させるのではない」<sup>59)</sup>。ストルーヴェは工場制繊維工業が農民の副業ないしは農民的営業を没落させることを否定しさえしている<sup>60)</sup>。かれはかれの資本主義発展の図式に拠って、商品生産のうえに本来の資本主義が成立することだけを見て、後者が農民収奪・農工分離を完成するという過程を否定してしまうのである。そして、ロシアにおける経済的諸矛盾をすべて資本主義以前の遺産として説明する。ダニエリソンはロシアの失業人口の大きいことを資本主義化のせいにしたが、ストルーヴェによれば、それは現物経済的環境の遺

58) Там же, стр. 283.

59) Там же, стр. 246.

60) Там же, стр. 227. 「農業生産物の資本化のうえに工業の資本化が建設されるのであって、その逆ではない。このようにいうことによってわれわれは、ロシアの経済的發展にかんするナロードニキ理論のもっとも基本的な命題のひとつ、すなわち大規模加工業の發展は農耕農民を零落させるという命題をしりぞける」。Там же, стр. 246.

産たる非資本主義的過剰人口である<sup>61)</sup>。ストルーヴェは結論部において、「資本制的生産の発展ばかりでなくその発展の不足もまた、われわれを苦しめている」という「資本論」の序言のなかの句をエピグラフとして掲げているけれども<sup>62)</sup>、ストルーヴェの主張する内容は、むしろ「資本制的生産の発展ではなくして、その発展の不足が、われわれを苦しめている」であった。

(5) ストルーヴェの市場論の半ばは、すでに述べたところにふくまれている。すなわちかれは、現物経済の商品経済への転化（交換経済の発展）は、農業からの加工業の分離を基軸とするところの社会的分業の進展を内容としており、それ自体が相互の市場形成をとまなうと考える。すなわち社会的分業＝市場である。ただし、かれにおいては労働力の商品化が決定的なものとしてつかまれている（前述を参照）ことに対応して、労働力商品化過程の市場に対する意義が明確でない。さらに「狭義の資本主義」の市場については意外にも、かれはヴォロソフ・ダニエリソンのいう「第三者の消費」が剰余価値実現のために必要であるとして、ナロードニキの市場理論に同意し、本書よりもすこし前に刊行された友人トゥガンの「現代イギリスの産業恐慌」における市場問題の処理法、すなわち拡大再生産表式の叛路説的解釈を、現実的でない仮定から出立するものとして批判している<sup>63)</sup>。

だからストルーヴェの市場理論は合法マルクス主義にもっともふさわしいトゥガン、ブルガコフの市場理論とは異って、合法マルクス主義としてはむしろ異例的な、過少消費説を含蓄するのであるが、しかしそれはロシア資本主義の

61) ストルーヴェは、現物経済のひくい生産性が人口を飽和状態にしていた改革前の状態が、改革後にもみきつがれているところに基本的な問題があると考え。しかしそれだけではない。「ここにわれわれの眼前にあるのは、現物経済的過剰人口の光景であるが、それは商品経済的要因と、農奴制時代の社会組織からうけつがれたその他の重要な諸特徴によって複雑化されている」（*Там же, стр. 200*）。ストルーヴェは注において、「マルクスの人口論はマルサスの理論を補完するものであって、論破するものではない——これがわれわれの意見である」（*Там же, стр. 184(прим.)*）といい、F. A. Lange を援用している。この点をレーニンは「ストルーヴェのマルサス主義」としてしつように批判した。「レーニン全集①」, 488-508 ページを参照。それはともかくとして、「ロシアの住民大衆の貧困は、その圧倒的大部分が、資本主義の産物ではなくてむしろ現物経済の遺産である」（*Там же, стр. 284*）という言葉はストルーヴェのナロードニキ批判の中核的思想をあらわしている。

62) *Там же, стр. 285*。

63) *Там же, стр. 251-252 (прим.)*。

市場欠如論へつながるのではない。なぜなればストルヴェによれば、第1に、現実には資本家と労働者だけから成る資本主義社会は西欧にさえ存在しないし、ロシアについては論をまたない。そして、「国の領土がひろく住民の数が多いほど、それだけその国は自己の資本主義的發展のために外国市場を必要とすることがすくない」<sup>64)</sup>。しかるにロシアはそのような国であり、「シベリヤ鉄道の建設とともに、わが国の加工業の生産物にたいするアジア・ロシアの市場としての意義は何倍にも増大する」<sup>65)</sup>。またある論文では「そのうえシベリヤ、トルキスタン、一部はベルシャのような後背地をもつロシアは、その資本主義的工業を繁栄させるために外国市場を必要としない」<sup>66)</sup>とも述べている。これはレーニンの国内植民地の理論の先鞭といえるものをふくんでいる。

(6) ロシア資本主義はゆたかな国内市場を可能性としてもっているとするストルヴェの考えは、ロシアとアメリカの類似性とロシアのアメリカ化の可能性についてのかれの見解につながっている。ストルヴェが鉄道についてアメリカとロシアの類似を指摘したことはさきに述べたが、それだけではない。かれはワグナーが「植民地をもつ大ブリテン、アメリカ合衆国およびロシアは、それぞれの政治的統一体の内部に、きわめて種々な自然的条件をもつ広大な地域を包括しており、中央ヨーロッパの比較的小さい諸国家とは反対に、自足的な経済的統一体となりうる」<sup>67)</sup>と述べているのを引用して、「ロシアとアメリカの両国のあいだには歴史的発展、政治的および文化的水準の点でさまざまな差異があるにもかかわらず、このような類似はきわめて大きな意義をもっている」<sup>68)</sup>という。「北アメリカの例がもしなにかを示すとすれば、それはつぎの一

64) Там же, стр. 284.

65) Там же, стр. 257.

66) P. Struve, "Zur Beurteilung der kapitalistischen Entwicklung Russlands", *op. cit.*, S. 2.

67) П. Струве, указ. соч., стр. 259; Vgl. A. Wagner, *Grundlegung der politischen Oekonomie*, 3. Aufl., T. 1, 2. Halbbd. 1893, SS. 644-648. レーニンが「アメリカ型」と「プロシヤ型」の發展類型を第一次ロシア革命期に定式化したことは周知のとおりであるが、ロシアとアメリカの比較論は1890年代に相当活潑におこなわれていたことを知るべきである。

68) П. Струве, указ. соч., стр. 259-260.

事、すなわち一定の条件があれば、資本主義工業はほとんど国内市場だけにもとづいて、きわめて広汎な発展をすることができることである<sup>69)</sup>。」その「一定の条件」のうち、国土の広大、人口の多数、自然条件の多様さという基本的なものはロシアにそなわっている。克服さるべきは、いまなお現物経済とその遺産が相当に存在していること、広義の資本主義の発展の不十分さ、とくに農業のおくれである。かの1891—92年の飢饉を招いた農業生産力のひくさこそは、ロシア資本主義の足かせである。「このような状態からの出口は、全国民経済を、社会的分業のできるかぎりの発展という方向で改造することに帰着するが、その結果は一方では農業経済の生産性の向上、他方では大加工業の進歩であろう<sup>70)</sup>。農業の発展は、農業技術の合理化、それによる粗放経営から集約経営への移行を必要とし、そうした農業の主体として「経済的につよい、商品生産に適応した農民<sup>71)</sup>」をつくり出すことが経済政策のひとつの主目標でなければならない。上の条件をみたすことができるならば、「ロシアが経済関係において発展することができるならば、その発展はアメリカ合衆国がその代表者であるような国民経済の型に近づくことにほかならないであろう<sup>72)</sup>。ロシアとアメリカとの越えがたい差異を説き、またたといロシアがアメリカ化できるに

69) Там же, стр. 260.

70) Там же, стр. 284.

71) Там же, стр. 281. ストルーヴェは、商品生産は農民層の分化を生じせしめる進歩的要因であるとする。「貨幣経済の発展と人口の増大は、農民層が2つの部分へ分解することへと導く。すなわち、あらゆる形態と段階の資本という新しい力の代表者から成る経済的につよい部分と、いまひとつは半自立的な農耕者と真の雇農とからなる部分とへの分解に導く」(Там же, стр. 239)。かかる分化傾向に対して、一般的にみられる「経営の技術的非合理性」は分化を阻害する水平化 нивелировка の要因であり、債務奴隷制 кабала はそれを基盤としている、という。Там же, стр. 226. 農民層分化と債務奴隷制の対抗的把握、および技術の視点に注意。ストルーヴェは粗放農業と集約農業の比較を熱心に述べているが、それはかれにとって大切な論点であった。

72) Там же, стр. 261. ちなみにエンゲルスはダニエリソンへの書簡において、ダニエリソンにとっては心外なことに、注66)のストルーヴェ論稿(=ダニエリソンの「改革後の……概要」)に対する書評)の主張を多くの点で認めたが、ただストルーヴェはロシアのアメリカ化をかんたんに考えすぎているとし、「そのばあいかれ(ストルーヴェ)は、合衆国がはじめから近代的でありブルジョア的であったこと、合衆国が純ブルジョアのな社会をつくるためにヨーロッパ封建主義からのがれた小ブルジョアと農民によって創建されたことを、すっかり忘れている。これに反してロシアには原始共産主義の性格をもった基盤がある……」と批評している。1893年10月17日付書簡、「マル・エン選集⑬」, 246-247 ページ。



しても、けっして望ましいことではないと考えるダニエリソンとは反対に、ストルーヴェはロシアのアメリカ化が資本主義化の進展によって可能であるとし、かつアメリカをひとつの理想ともしている。ストルーヴェのそのような見解は、この書物の結語に集約されている。「われわれの野蛮さを認めて、資本主義に学ぼう」<sup>73)</sup>と。

(7) 最後に、現在のロシア経済の基調を規定しているのは穀物収穫か景気循環かというダニエリソンの提起した問題に対する回答は、ストルーヴェにはみられない。それにはトッガンが詳しく答えている。ストルーヴェは、ロシアの資本主義化はもはや動かすことができなるとすると同時に、資本主義の成熟度のひくさを強調するのに対して、トッガンはストルーヴェにくらべてロシアの資本主義をより成熟したものとみているが、その点は次節で述べる。(未完)

[追記] 吉原泰助氏が長篇「蓄積論における古典と近代(一)」(「商学論集」33巻4号、1965年3月)において拙稿「一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説」,「ブレハーノフのロシア資本主義論」に閑説しておられるのを本稿脱稿後に読んだ。ナロードニキのロシア資本主義論の段階設定(「二つの道の可能性の思想」と「ロシア資本主義没落論」)についての私見に対して吉原氏の賛成をえたことをよろこぶとともに、ひとつだけ補足しておきたい。吉原氏はダニエリソンの1880年論文(「改革後の……概要」第1篇)を「二つの道の可能性の思想」から「没落論」への「中間的・過渡的資本主義論」とされる(上掲、155ページ)。そのこと自体は了解できるが、ダニエリソンは本稿において述べたように、1893年においてもやはり、二つの道の思想をしばしば援用してそれを没落論の基調に溶けこませている。だから1880年論文がとくに「過渡的」であるとするよりも、ダニエリソンの思想の全体がそうした一種の非純粋性をもっていた、と考えるべきであろう。他方、もっとも純粋な没落論者がヴォロンツォフであることは、わたくしも旧稿で指摘したところ(「経済論叢」89巻1号、34ページ)で、吉原・松岡両氏と同じ意見である。しかし、ダニエリソンにおいては二つの道の可能性の思想は70年代のそのような生氣ある意味を失い、没落論のなかにつつみこまれている(もちろんそこに論理的矛盾がないではない)のであるから、かれの労作を没落論を基調とするナロードニキ的ロシア資本主義論の、もっとも純粋とはいえぬがもっとも集大成的な、整えられた労

73) II. Струве, указ. соч., стр. 288. これが本書の結びの言葉である。

作であるといってさしつかえないであろう。なお、ダニエリソンの思想が80年代から90年代へかけて変わったとするカラターエフの説(См. Народническая экономическая литература, 1858, стр. 54-58)があるが、本質的にはあまり変わっていないように思う。